

山と博物館

第19巻 第5号 1974年5月25日 大町山岳博物館

チグ・ハグ



鹿島嶺 — 遠見尾根より

撮影 内田博文

愛鳥週間が終了した数日後、四十七年度鳥獣関係統計(環境庁)が送られてきた。それによると四十七年度中に日本中で捕獲されたキジ、ヤマドリ、カモ類などの鳥類の総数は一〇三〇三〇七羽となっており、四十六年度の一〇七九六五八八羽を下回っているとはいえず、この数字にはたゞく驚くばかりである。獣類は九五七五七頭と四十六年度より五六二八頭上回った数が捕獲されている。これらの鳥獣類は狩猟免許をもった人以外は捕獲できない訳である。四十七年度の免許交付者は四六二二八四人で、前記の鳥獣合計から免許所有者一人当たり捕獲数を算出すると、約二十四頭捕獲していることになる。

鳥獣行政関係予算は、一三七六一六八〇〇〇円であり、このうち、放鳥獣費は約二六%、鳥獣保護員関係費〇・五%、鳥獣生息調査費約二%といった具合……一方では「愛鳥週間」があり愛鳥精神を説き、他方では一〇〇〇〇〇〇頭以上の鳥獣が撃ち殺されているチグ・ハグさ。

最近、首相は「五つの大切」人間を、自然を、時間を、モノを、国と社会を——とっておられるが、絵そらことに終ることの多い昨今、遅きに失した感もあるが効果的に実行してもらいたい。

(グチ猿)

遭難

—救助隊員の立場から—

尾沢 洋

今年の山は例年になく雪が多かった。当然の事ながら春のくるのも遅い。

三月、まだ全山が雪に覆われた後立山で遭難が連続して発生した。

そして数名の若い命が一瞬にして雪の中に消えていった。その彼等は「山に青春をかけるのだ」という。彼等は本当に「悔いなく青春をかけて」山に入っているのだろうか。

鹿島槍岳で発生した遭難に救助隊の一員として参加し、彼らの行動・言動に接し、私は私なりに幾多の疑問を感じざるを得なかつた。



ヘリコプターによる救出準備

遭難の状況

三月二十三日、午前十時四十分最初の事故が発生した。

大阪西淀川勤労者山岳会の川口氏が鹿島槍岳赤岩尾根上部を他の三名と下降中、雪崩にまきこまれ行方不明となったのである。

下山してきた三名の報告をうけた勤労者山岳会(略称労山)は直ちに対策本部を設置、三月二十三日夜二十名の仲間が大阪を立ち、二十四日朝赤岩尾根にむかい高千穂平にベースを設け捜索活動に入った。

三月二十四日、午後四時四十五分、中岩沢に人影を発見、六名が救助にむかう、ヤセ尾根を下り危険が一杯の中、ようやく到着した。しかし、そこにいたのはめざす川口氏ではなく、同じ頃遭難したH大山岳部の二人であつた。

「行方不明の仲間も心配だが、まずケガをしている二人を助けるのが先決」と彼等はH大パーティーの救助を最初にする事にした。二人の状態などから協議の末、ヘリコプターによる救出しか手はないだろうということになった。

そこで、ヘリの要請、その他の連絡のため笠松氏がベースに戻り、他の五人は二人と共にその地にビバークをすることにした。

三月二十五日午前五時、食糧、それにヘリへの目印の赤布などを持って笠松氏は仲間二人と一緒にベースを離れた。

出発後まもなく三人は表層雪崩にまきこまれてしまった。そして発見された一人は間もなく死亡、笠松氏と他の一人は五月十八日時

点でまだ発見されていない。

以上が遭難の概要である。また、後にわかつた事であるが同じ頃、東尾根をひとつへだてた荒沢では東京の山岳同志会の五人パーティーがやはり雪崩に巻きこまれ埋り、鹿島槍周辺は悲劇の場と変つていった。

救助活動

三月二十五日、救助隊は地元の大町労山を中心に編成された。フリーダーは三重遭難をさけるため、高千穂にいる彼らに行動ストップを要請した。眼前で三名の仲間を失い、一刻も早く救出したいという彼らの気持は痛いほどわかつた。彼らは早急の気持をおさえ、良好指示に従つてくれた。要請したヘリの到着がおくれ、大町高ランドに着陸したのは正午すぎ、すぐに地元救助隊のS氏と労山のK、山岳同志会の一人が乗り偵察にとびつた。一時間にわたる飛行の結果、「荒沢はまったく人影なし、雪崩も多発し人の生存する余地なし、今日ではまずケガをした二人を助ける」ということになった。私たちはヘリで高千穂に向かつた。以下は救出のため、谷へ下りたFのメモである。

「ヘリの起こす激しい風にあおられながら谷に立つ。谷のちよつとした雪のコブが目標で、ホッピングしていったヘリは、僕を雪の上に落とすやいなや「それ逃げるッ」とばかり反転して脱出していく。Hの二人は雪洞の中にいた。業務的な口調で口早に質問と指示を与える。一人はすぐに雪洞の外に出るが、もう一人はシュラフに入ったまま雪洞の底に沈んでいる。激しい言葉をたたきつけてほり起こす。二人をアンザイレンして雪壁をずり落とす。二人とも、よくもまあと思えるほどの悲鳴をあげる。赤岩の支稜で三人の労山の救助隊と接触する。

ヘリが飛来した。一人ずつ十五メートルくらいのザイルでつり下げ、高千穂までピストン輸送で上げる。腰の股沢だろうか、背中を



遭難遺体の搬出

つらぬくような唸りを聞く。最後に脱出。十一ミリのザイルは不安だ。足が雪面をはなれたとたん十回ほど、ヨリが戻って何が何だかわからなくなつた。高千穂で仲間のOが言つた。「Fさ、顔が青いぞッ」正気な奴なら三千メートルの空の上でクルクルふりまわされればおかしくもなるわいなッ

二人を無事に助けたことができた。山は夕暮れがせまり、これ以上救助活動続けるのは無理なので下山、明日にそなえる。翌日はすでに発見されている遺体の搬出を中心に行なつた。Fのメモの続きである。

「布引沢の出合いに降りた四人は大急ぎでスラブ尾根の末端にある大きな木に逃げ上る。もう雪はキラキラ光り始めています。時々、本谷の方向からドドドドという雪崩のタルに飛びこむびびきが伝わってくる。赤岩尾根に配置したOをキャップとする雪崩の監視班にすべてをまかせた以外にない。今朝の時、みんなに「新しいツンパをはいてきた

か」とおどかしておいたので、皆ひどく緊張している。

それは地獄の入口での作業だった。Fのおどしのためばかりではない。山のデッカサが谷の深さが、そびえる尾根が常に私たちを圧倒し、ねらっているようにみえた。私たちは全身を耳にし、雪崩の恐怖におびえながら、急いで遺体を梱包した。

救助活動を終えて

近年新聞紙上、あるいは山岳雑誌等には、遭難事故と山のモラルの低下の問題がよく載っている。「近道をして雪崩におそわれた」「冬山に備えデポしておいた食料をとられた……」等々。かつて私たちが幼い日々あこがれた「山男」のイメージとはほど遠い登山以前の事が問題になっている。今回行方不明の仲間の偵察を中断して生存者の救出にあたった大阪のパーティーの行動はそれが山ではあたり前のこととはいえ、いわゆる「山男の友情」を地でいったものといえよう。しかしその代償が一人の死亡、二人の行方不明者を出す結果となったのは、あまりにもごすぎるものであった。救出された二人の手記(大町警察署の記録)は次のように述べている。「……：雪崩の記録はたのんだが、救助の要請はしなかった。」この文字をみる時、たとえそれが事実であったとしても、わりきれない気持を抱くのは私ひとりではあるまい。ましてや救助に向かい雪崩にまきこまれた三名の仏も、これでは浮ばれないだろうと思う。

「山の事故は何故おきるのか」今度この文を書くにあたり、多くの山岳関係者をたずね貴重なお話をうかがった。私たちには想像もできないようないろいろな事実も教えられた。その中で、最も驚いたのは救助にあたる関係者の多くが登山者を信用していないことである。「今の街のやつらは山へ行く資格なんかねえよ」とまで極言する人さえいた。「山へ行く資格」それがどのようなものであるかと

いうことは私にもわからない。だが一般的に最も必要とされている登山計画書の提出さえしていないパーティーがふえていくことは本当のようだ。自分たちだけがという意識のもとに行動しているのであろうか。先のH大パーティーも大町警察署の話では登山計画書は提出されていないという。全くの偶然で西淀川パーティーが同じ谷で遭難をおこしたため、発見されたからよかつたものの、さもなくば完全にアウトである。里では彼らがどこを歩いているのか皆目見当がつかないのだから……。彼らの一人はこう言っている。

「二十三日朝七時のニュースで、ぼくらが雪崩に流されたことは一言もいわず目の前が真っ暗になったが、昼のニュースで勤労者山岳会の人々が雪崩にあつたことを知り同会の人を助けに救助隊が来たことを知り待っていました。I君は身動きもできない状態だったのだ。あのまま発見されなかつたら、私一人で連絡に下山する決意でした。」(三月二十八日付毎日新聞。二十三日というのは時間的に考えられない。たぶん二十四日のましがいいであろう)中岩沢が当時どのような状態であつたかは先のFのメモをみるまでもない。

また、今度の事故に直接関係のないことだが、最近の山をめざす人たちの気質の変化も興味深いものがある。登山口で計画書を出す指導員がチエックし適切なアドバイスをする。まことに一般的な風景であるし、あたり前のことである。しかし最近の人たちは指導員にいろいろ言われることを極度に嫌うという。どうやら恥と考えているらしい。山の雪のつもり方、雪庇の状態などは決して例年一律ではない。山は生きている。そのことを一番良く知っているのは地元の人だ。その地元の指導員の助言に謙虚に耳をかたむけることのできない行為こそ恥ずかしいことではないだろうか。ましてやそれが、そのまま遭難事故につながっていくのだから情けない。それが一部のパーティーのみでなく登山者一般にみら

れる最近の傾向とか。「青春を山に賭ける」人たちにしてはなんと雑な「賭け方」であることか。

私たちは救助活動に参加しただけである。当事者ではない。だから事故について、特に「何故そのようなことが……」という原因については全くわからぬことである。たとえ想像できることでもそれは西淀川なりH大などの事故報告書が発表されるまで、とやかく推測することはさげたい。しかし原因はともあれ、ふえ続ける遭難には無性に腹が立つ。今度の遭難の直前にも白馬大雪渓や杓子岳双尾根で連続して遭難がおきた。いずれも安全な尾根道を歩かず近道をしたためだという。白馬で遭難したパーティーは昨年と同じ場所と同じ事故をおこしている。「充分反省していたんですが……。別のパーティーが横切ったので私たちも安全だと思って」他人に先を越されたくない心理が昨年の苦さを忘れさ



悲しみの対面

せてしまっている。双子尾根のパーティーは斜面を登りながら「危険だなあ」と感じていたという。

おこるべくしておきた遭難、それは当事者のみでなく、他の多くの人々に大きな負担であり、またそれは社会的な問題にも発展してきている。谷川岳や剣岳では、数年前から登山者を規制している。危険な山を最も多くもつ長野県にはその規制がない。「登山者を信用して……」条例は作られていない。この関係者の気持を泥靴でふみにじっているのは登山者自身であることを知るべきだ。おそらく近い将来、規制条例の問題が再論議されるだろう。もしこの長野県で登山規制条例が作られたとしたら、それは「登山者に対する信用」がゼロになったことを示すことではないだろうか。

最後に報道陣の取材についても一言いわせてもらいたい。先の事故で偵察飛行にとんだヘリが帰った時、偵察員はすっかり報道関係者に囲まれてしまった。救助にあたる私たちが警察との打合わせに入ったのは到着してから二十分もたつてからである。一刻をあらそう報道の仕事がわからないわけではないが、事は人命にかかわることである。救助活動に支障をきたすような取材方法は、強く反省してもらいたいと思う。

残雪の山は今日もその美しい姿をみせている。Fはメモの最後に、「熊手で一気にかき落したような雪崩の跡をみながら、ソクソクと迫る人の命のはかなさと、火花のような美しさに思いをはせた」と書いている。山の美しさ、偉大さ、私たちはそれに開いた心で感得るのではない。美しさ、すばらしさに同化できるような山行を続けたいものと思う。

(北安曇郡小谷村南小谷)

山菜と私

松沢寿子

春なかば、桜の花が散って西山にこぶしが咲く頃、安曇平のあちこちの庭先から、味噌炊きの煙が立ちのぼる。夜になると近所となりの人が集まってきて、味噌豆つぶしや味噌玉づくりが始まり、賑やかな一時がすぎる。私が子供の頃は、この味噌炊きは春の宵の楽しい行事であった。

次の日味噌玉を縄にあんで天井裏につけてしまおうと、味噌炊きの道具を納屋にしまいこみ「明日あたり、麓川べりへゼンマイとりに行ってくるか」ということになり、母はせつせと弁当の下ごしらえをしたものである。

もう二十数年前のことであるが、この味噌炊きを終ってから山菜とりに行ったことが、「山菜」といえば私の脳裏によみがえってくるのである。

近頃は仕込み味噌がさかんで、各家庭でそれぞれ好みの味噌を作るようなこともなくなり、さびしい限りである。

大町の犬の窟から麓川へ抜けるこの道はツツジやヤマブキが咲き、ウグイスが「キョキヨッ、キョキヨッ」と鳴いていた。

麓川谷で炭焼きをしていたおばあさんが、この道でクマに会った時の話など聞きながら行く、いつの間にか日向山を越えゼンマイの城についている。

母たちはずつく袋を出してせつせとゼンマイをとりはじめる。私はその辺の花をつんだり坂の枯草の上を滑り台にして遊んでいた。時々私が「あった、あった」と大声で知らせ母たちを呼び寄せると、それはいつも二七ゼンマイ（オニゼンマイ）であった。

ゼンマイはじくくした湿原のようなところに群生しているので、城に入るとひと背負

とるのにもさして時間はかからない。

ゼンマイの城をひとととりまわって、まだ時間があると川原においてチチコグサの若芽を摘んだ。チチコグサは餅に入るとヨモギより足が強く味も数段まさっていると思う。

母は草餅にはチチコグサしか入れたことがなかったが、今ではその麓川もすっかり開発され、私が遊んだ頃の面影はすでないことであろう。

今私は白馬山麓の梅池高原に住んでいる。私達がここにロッヂを建てた十年前は、家のまわりは、ワラビの城であった。

主人が堀立小屋を建てて基礎工事をはじめたのが五月のはじめ、六月の梅雨時には小屋の中にワラビがよきよきと出た。

また、家の前は湿原なのでゼンマイの城でもあった。

朝起きてみると村のおばあさんがゼンマイとりにしている。次の朝こそ早起きしてとうとうと思つて早起きしてついでと、すでに摘みあともみずみずしく残つていて、年寄りには勝てないなあと思つた。

親の原のワラビはよく肥えているので、きつい塩漬にして貯え、冬調理して出すとスキヤーに大変喜ばれる。それ以外にコゴミ、ゼンマイ、ウトブキなどがあるが食べ頃は芽が出てからせいぜい十日くらいであらう。

私はここに来て、今まで知っている山菜以外に他にいくらかでもおいしく食べられるものがあることを村の人達からおそわった。

イラ、モミジナ、ミズナ、ヤマソなど、これは塩漬しておくワラビやコゴミと同じように保存できる。フキは卵の花漬で塩とオ

カラを半々くらいの割合で漬けると色よく漬けることができる。

都会の人はウドは土に近い色白い部分を持たないが「ウドのうら折れ嫁にくれるな」といわれるくらい、うら先のやわらかいところは風味がよくおいしい。

それから、白馬山麓の山菜として、欠くことのできない、それこそ絶対といえるものにヘイジクがある。これは御殿場付近から上の方に群生している。親指くらいの筍は皮をはぐとアスパラガスくらいになってしまうが、とりたてを銚缶あるいは鯖缶を入れ味噌で味つけをする。

これを食べるのはその場で石の炉をつくって集めた枯木で煮るのが一番である。

子供をつれコッヘルを持って六月の梅雨の晴れ間に一家で箱狩りをする、それがいつの間にか我が家の年中行事のひとつになってしまつてい

十年前広い草原だなあと思つていたこの親

の原もいたるところにヒユツテやスキースキー施設ができ、何んとなく狭くなったなあと感じる今日この頃である。

また、この台地には蛇はすんでいないものと信じていた私は、昨年の夏我が家の庭先に親子づれの蛇の訪問をうけ、びっくりかえりそうなくらい驚いた。

主人は「人が多くなりや、ねずみも多くなり、そうしりや蛇だつて出るさ」という。

十年前、草原の中の一軒家のまわりにあつたワラビやゼンマイの城はいつしか消え、觀賞用に山菜を植木鉢に植える時代になつてしまつた。遠くまで出かかないと山菜はとれなくなつてしまひ、かわりに登ってくる自動車の数がぐんと増えた。今までワラビやゼンマイのあつたところも排気ガスがふりまかれる。

私はせめて山菜とりの時くらい駅から歩いてでも歩きたいものだと思つた。

ゲレンデの雪がとけ、山裾が緑の台地に変る日を持ち遠く思つている。その時期がきたなら、私はコッヘルをリックに入れ、子供たちと一緒に摘んだ山菜を煮て食事をしながら、子供たちに自然の大きさ、自然のありがたさ、そしてすばらしさを身をもって感じてもらいたいと思つている。

(白馬ベルグハウス)

…編集部註…

ニセゼンマイ……オニゼンマイ
チチコグサ……カワラハハコ
コゴミ……クサソテツ
ウトブキ……ヨブスマソウ
イラ……イラクサ
モミジナ……モミジガサ
ヤマソ……ハンゴンソウ
ゼンマイ……ヤマドリゼンマイ
ヘイジク……ネマガリダケ



ゼンマイ (ヤマドリゼンマイ)

山と博物館 第19巻 第5号
発行所 長野県大町市TEL②②①①
印刷所 大町市下仲町 大町山岳博物館
定価 年額四〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野二二二九三)